

M. Guttentag and P. F. Secord,
*Too Many Women?: The Sex Ratio
Question*, Beverly Hills, CA : Sage
Publications, 1983, 275pp.

本書は性比不均衡の社会的影響、特に性役割に対する影響を扱ったものである。二人の著者は社会心理学者の夫婦で、妻の M. Guttentag が1977年に亡くなった後、夫の P. F. Secord が妻のアイデアと本書の約半分に当たる部分の遺稿をもとにこれを完成させた。

本書は第Ⅰ部歴史からの手がかりと第Ⅱ部現代における観察結果の二つに大きく分けられるが、それらに先立って第1章序論——性比の問題——で問題提起と簡潔な仮説提示がなされている。第Ⅰ部は第2章古代ギリシャ（アテネとスパルタ）における女性の役割、第3章中世ヨーロッパにおける愛と女性べっ視、第4章正統派ユダヤ教徒における性と家族、第5章アメリカ合衆国草創期のフロンティア、南部、ニューイングランドにおける女性の4章から成っている。第Ⅱ部は第6章性比から性役割へ、第7章アメリカ白人における性役割と家族、第8章アメリカ黒人における性役割と家族、第9章性役割と家族の将来動向の4章から構成されており、第6章で改めて詳細な仮説提示がなされ、第9章で結論めいたことが述べられている。

本書の主張は男女各々にとっての潜在的な結婚相手の数が性行動、性道徳、結婚、離婚、出産、家庭の安定性といった社会の諸側面に対して大きな影響を与えるというものである。この背後には、社会心理学・社会学の交換理論に基づく以下のような仮説がある。すなわち、女子人口の過剰が生じた場合には男性が別の交際相手を見つけやすくなるため、特定の女性との関係に依存する必要がなくなり、ダイアド（二者）の力関係で優位に立つようになる。逆に、女性は別の交際相手を見つけにくくなるため、特定の男性との関係に依存する必要が生じ、男性に対して高い水準の満足を与える努力をせざるを得なくなる一方で、自らは低い水準の満足しか得られなくなる。さらに政治力、経済力といった構造的な力関係でも男性が優位に立っていることもあるため、男性にこびる女性が増える一方で、自立した女性が増え、構造的な力を獲得するために女性解放運動を起こしたりする。これに対して、男性は女性を大切に扱わなくなるとともに特定の女性にあまりコミットしなくなり、伝統的な男女関係とそれに伴う伝統的な性役割を軽視するようになる。その結果、社会が性解放的になるというのが、仮説の概要である。

著者たちは1960～70年代におけるアメリカ社会の変動の少なくとも一部が性比の変化によって説明できるとしている。しかし、各種の技術変化や女子の高学歴化、女子の就業による経済力の高まり、法律上の男女平等化、女性自身の性役割アイデンティティーの変化といった社会変動によって男性の構造的な力が弱まりつつあるので、このような性比の社会的影響は永続きしないと考えている。

人口学者にとって本書の主張の少なくとも一部は目新しいものではない。結婚難 (Marriage Squeeze) 仮説を唱える P. C. Glick や D. M. Heer は1960年代初頭から莫然とした形で同じようなことを述べてきたし、Spanier & Glick による黒人の配偶者選択に関する1980年の論文や Heer & Grossbard-Schechtman による性役割と女性解放運動に関する1981年の論文でも本書と共通するような主張がなされている。しかし、本書の概要は Secord によって1978年のアメリカ心理学会大会で報告されているので、最近ではむしろ人口学者の方が影響を受けている可能性も考えられる。本書の主張には多少の問題があるとはいえ、書物の形で大胆な仮説を世に問うたという点では評価されるべきであろう。人口研究者からみると第Ⅰ部はさまざまな学問分野の研究成果がうまくまとめてあって興味深い、第Ⅱ部は各種指標にしても分析方法にしてもやや問題があるようである。今後は第Ⅱ部の不足を補うような形で人口学者が実証分析を進めていく必要がある。

(小島 宏)